平城宮第二次大極殿屋根の一部復原

建造物研究室

第二次大極殿院地区の発掘調査報告書（学報第51冊）が刊行されるにあたり，同地区から出土した瓦を使い屋根の一部を原寸で復原することとなった。軒瓦とともに，隅木の鼻を覆い木口を風雨から護るための瓦製の隅木蓋も発見されているところから，隅部分を製作するこにした。完成後の展示場所として平城宮跡資料館の一隅をあてたため，スペースの関係でさほどの大きさはとれず，一辺２ｍまでと限定し設計を進めた。

発掘遺構から知り得た建物の規模は，桁行129尺・梁間54尺を身舎各15尺・庇12尺とする９間４間に分かち，基壇の出は各面13尺とみられた。これらのことから同報告書では，屋根を二重の寄棟造、軒の出は上下とも15尺と復原している。一方遺物からは，瓦割りを約30cmのピッチとする本瓦葺であること，隅木蓋の内法幅から隅木先端幅は約１尺あったことなどが知られる。

これらの基本事項をもととして，飛檐垂木は４寸５分×４寸の断面で瓦割りと同じく１尺に割り付け，茅負は奈良時代通有の直接瓦繰りを施す形に定めた。また隅である以上当然軒先は，反り上りをもっていたであろうから，ここでは配付垂木４本分で約４寸の反りをとっている。参考のため木部の設計図をあげておく。

木部の製作はさほどの困難さはなっかたが，いざ瓦を葺き始めてみていくつかの問題に直面することとなった。その内の最大事は鬼瓦をどの位置に据えるかということである。鬼瓦そのものが高さ58cm，幅55cmと大きいこともあって軒丸瓦の１本目ということはあり得ず，一定の寸法奥にひかえることになるが，どこが一番それに適しているかがなかなかむつかしい。

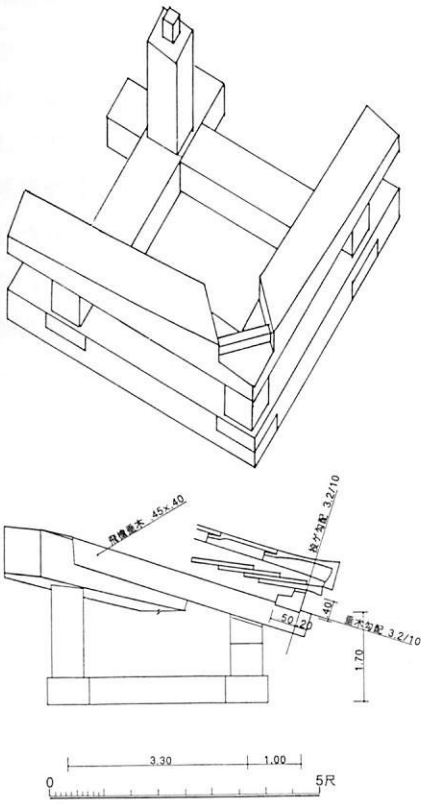
結局３本目の丸瓦の前ということに落ち着いたが，それでも隅行丸瓦と平行丸瓦の接点の水処理の問題が残る。ここでは隅行を優先させて，平行はそれに仕合わせるという方法をとって多少ともそのわざわいを緩和させるよう努めたが，なお一抹の不安はぬぐいきれない。熨斗積みの最下段の見付面を大きくとるいわゆる肌熨斗方法があり得るのかどうか，拾熨斗を３根もちいたがこれで良いのか，超大型軒丸瓦を鬼瓦上に使ってみたがどうであろうかなど，今後奈良時代の屋根葺技術とともにその葺上げの形態についても検討すべき点が多いことを，このささやかな復原を通じて，今さらながら知らされた思いがする。

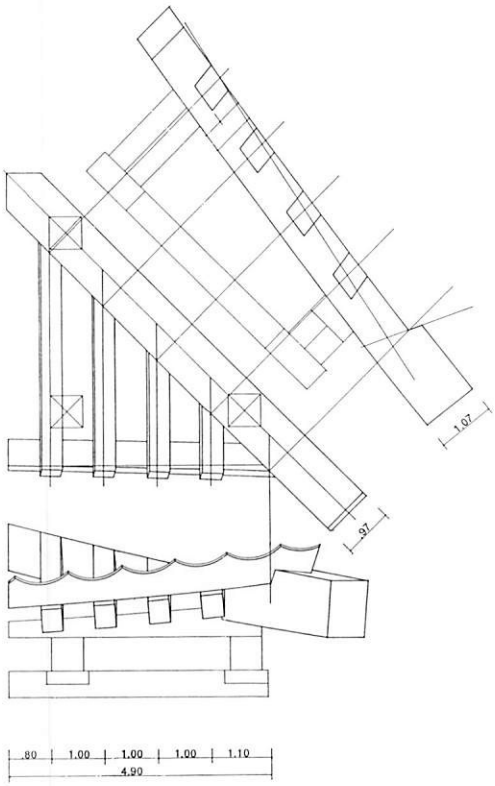
なお，隅木および垂木の木口にはそれぞれ金渡金を施した透紋の飾金具を藤原京大官大寺出土のものを参考にしてデザインし取り付けた。

使用した瓦の形式は次のものである。軒平瓦6663C，軒丸瓦6225A，鬼瓦上丸瓦6225L，鬼瓦ⅣA。

（細見啓三）

平城宮第二次大極殿復原屋根瓦葺立て中↗
平城宮第二次大極殿屋根軒まわり設計図→


母屋垂木 45×40
野地板勾配 3.2/10
40
50
2b
垂木勾配 3.2/10
1.70
3.30
1.00
0
5R


1.07
.97
.80
1.00
1.00
1.00
1.10
4.90